

# 仏典を読む (五)

## 仏典の中の現実

### ―「三毒五悪」の世界―

浜岡 政 好



何だか言訳けじみたことからはじめねばならないのは  
我ながらいまましい気がしないでもない。とにかく仏  
典と名のつくものに接するのは生まれて初めてのことで  
あり、「仏典を読む」などというクールな心境にはとても  
なれない。勿論、山陰の片田舎で育った私は、毎朝祖母  
や隣近所の木魚の音や読経の声で目覚めていたから、ま  
んざら仏典と無縁というわけでもない。

しかしお経と仏典では素材は同じにしても私には天と

地ほどの開きがある。私にとってお経は、まわりの年  
寄り達がいとも言っていたように「うちの方丈さんはい  
い声をしとりなさる」ということであり、それはお寺の  
境内のブランコやお彼岸のオハギなどと渾然一体となっ  
た生活様式の一部であった。

そしてそれをあらためて「思想」だの「知識」だのと  
いった意味内容をもつ仏典として捉えなおすこともなく  
今に至っている。したがって当欄に何か書かねばならな  
いはめになって周章狼狽、日頃の不勉強を恥じながら、  
仏典を求めてあわてて本屋に駆けこんだというしだいであ  
る。そういうことから「浄土三部経」を手にしたのも  
特に深い理由があつたわけではない。私の実家の檀那  
寺も、そして大学も浄土宗ということであれば、他の仏  
典よりは多少は縁が深かろうというぐらいな気持であつ  
た。

さて無量寿経を手にしたものの、それ程信仰心が篤い  
というわけでもなく、また基礎的知識が皆無の私には全  
く歯がたたない。デーパパンカラに始まる如来様の名前  
の列挙にたちまち音をあげてしまった。とはいっても、  
そこに描かれている安樂世界、一つのユートピアには関  
心がないわけではない。私が研究対象としている社会問  
題の世界はまさに浄土とは対極の世界であるが、それ故

に、逆に安樂世界への現実世界の諸々の社会的痛苦からの解放への志向は強い。ただ彼岸においてではなく、この娑婆世界でそれを実現することに力点がおかれてはいるが。

それにしても私は宗教上のユートピアは抽象的な觀念の世界にちがいないと思ひこんでいたので、ダルマーカーの聲願にみられる具體的な安樂世界の描写は予想外であつた。しかし社会問題研究の関心に引きつけて読むと、安樂世界の描写が具體的で精密であるほど、当時の民衆が苦しみ、そこから脱出したいと願つていた現実が逆に強く迫ってくるのである。だから私の目は仏国のすぐれたありさまと對比して描かれている「三毒五惡段」の現実世界の惡・苦のリアルな分析に釘づけになつた。

五惡・五痛・五燒として詳細に叙述されている現実世界の狀態は、マルクスのいう資本の對極に蓄積される貧困の世界（貧困・勞働苦・奴隸狀態・無知・粗暴・道德的墮落）やデュルケームのアミノーの世界を彷彿とさせる。しかしこの段が社会分析を企図して書かれているわけではないので、五惡がそのまま社会問題の類型になっているわけではない。

素人のあつかましきで五惡を社会問題論風にアレンジすると、第一の惡では欲望論をもとにした、惡の、とい

うより個々人の上にふりかかる災禍の必然の道理が展開されている。そこでの諸個人の貧窮、下賤などを個人の惡行の結果として理解するやり方はマルサス流の自由主義的社会問題觀に極めて近い。第二の惡は欲望の無規制狀態がもたらす人間關係レベルでの病理現象であり、第三の惡ではそれが「王法の禁令」への侵犯、すなわち犯罪にまで至るさまが描かれている。第四、第五の惡はパーソナリティ・レベルでの病理がとりあげられ、そのうち第四は比較的強者の、そして第五では下層の弱者のパーソナリティの崩壊狀況が問題とされていると思われる。問題現象の把握は經典が成熟衆生を企図していることから当然、人間關係論に傾斜しているが、その現実描写は「高度成長」以降の現代日本の狀況描写ではないかと思えるほど新鮮である。

以上、齒がたたないので仏典の表面をなめまわし惡にもつかない珍論を述べてきた。とにかく読み終えての私のささやかな感想は、最も倫匹無きこの十方世界を対象とする社会問題研究も、その志においては仏の教えとそれほどかけ離れたものでもないということである。仏もこの世界での努力を、「正心正意、齋戒清淨、一日一夜、勝在無量壽國為善百歲」といわれているほどだから。

（はまおか まさよし 社会学部助教授）